

# 噴水物語

岡本かの子

青空文庫



「それはヘロドトスの古希臘ギリシア伝説中の朴野な噴水からアグリツパの拵こしらえた羅馬市ローマ中百五つの豪壯な噴水、中世の僧院の捏ねっ怪かいな噴水、清寂な文芸復興期の噴水、バロツコ時代の技巧的な噴水――どれもみな目に見えぬものを水によって見ようとする人間の非望を現わしたものではないでしょうか」

「これも理想を追求する人間意慾の現れと見るときには、あまりに雛型過ぎて笑止なおもちやじみた事柄ですが」

「だが英国くらい昔から噴水に縁の無い国はありませんわ」と若い夫人は老いたる良人のロジャー氏と私を交る交る見て笑いながら言った。

或る年の夏である。ロンドンのチエルシーに住む室内設計家エム・ロジャー氏の客間である。私はロジャー氏の新しく作った室内仕掛けの新噴水を見物するためにエドナ夫人から招かれた。夫人はただ古典詩人というばかりでなく東洋に非常に興味を持つというので、その招待は東洋の婦人の私に近付きを求める為めでもあつた。

新噴水は大広間の床を大きく楕円形に掘り窪めて、その底に据えられてあつた。

短い柱から肋骨ろっこつのように左右相對に細長い水盤が重なつて出ている。上は短かく次々と少しずつ長くなって、最後の盤はペリ

カンの嘴くちばしのように長い。盤の一つ一つは独木舟まるきぶねを差し込んだように唐突で単純に見えるが、その底は傾斜して水の波浪性を起用し、盤の突端までに三段の水沫を騰のぼらしている。

水を押し上げ、水を滴したたらす仕掛けとしてはこれで充分である。而も与しかえられたる水量を最も時間的空間的に形式表現化する方法手段に於ても経済的效果を極めている。(今ではこの様式のものには珍らしくもないが、当時独仏の表現派芸術が漸ようやく普遍実用化されて、家具や室内装飾に盛んに取り付け出された時代に、この様式の噴水は欧州でも珍らしかつた。まして英国では異端の方であつた。)

私は床から四段ばかり階段になって下つたこの噴水の窪地へ降

りて、ロジャー氏の説明を聴いた。ロジャー氏は齡のせいか少しとぼとぼする気魄を無理に緊張させるように警句を使つたり、誇張した譬えたとを持つて来たりして、私に新噴水の力学上の関係や構造の近代性を頻しきりに説明した。磊落らいらくを装っているが、若い愛妻の詩的精神に使役されて、如何にこの噴水構造に苦心したかを暗に談話のうちにはほのめかした。そしてやや疲労して来ると、若い夫人から絡からみつかれている無形の電気網を振り切るように肘を頻りに後へ排する癖があつた。

だんだん会談に疲れたか、氏は「科学は情熱だからね」と殆ど泣き笑いともいふべき語調を床にいる夫人の方へ投げかけた。夫人は素知らぬ顔で水量の平衡を保つて、如何にも健全そうな噴

水を、とみこう見していたが、

「なに言つてらつしやるのです」と床から私のいる窪へ階段を降りて来た。

「あなたがいくら巧者なことを仰おつしやつても駄目ですわ、この噴水には水の仙女ニンフが一人も現れていませんわ」

「そらまた始まつた」

ロジャー氏は苦笑して横を向いた。夫人は良人おつとに構わず私に向いて言うのであつた。水には落下の性を姿に現したプリムノという仙女ニンフと、流暢りゆうちようの性を現したカンリロエという仙女ニンフと、清浄を現したアカステという仙女ニンフと、飛沫しぶきを現したプレキサウレという仙女ニンフとが巢付ニソフいている。他の水の形ではこの中の一人か二人し

か見えないけれども、噴水になるとこの四人の仙女ニンフが一度に現れるところが特色である。しかし、いくら噴水といつても凡庸のは駄目である。名作になるとはじめてそれらが現れる——と。

私は「それは詩的象徴のお話しなんでしょう」と軽く訊ね返した。ところが夫人の答えは

「いえ、ひょうびょう縹渺とほんとに目に現れるのです。私は随分見ました。方々のよい噴水で」

夫人はそれからベルサイユの噴水中ラトナの水盤の話や、フロレンスのベツキオ宮内の噴水の話や、現代ではシカゴのバッキンガムの噴水に現れる仙女ニンフの話をした。しかしより多くローマの噴水に就つて語った。



この豊量に水に恵まれた都には、聖ピエトロ大伽藍がらん前のピアッツアの噴水を中心にして、僧院にも市場にも全都に散在している。製作年代は各世紀に互わたり、様式は時代の制約を受けつつ工夫の限りを尽している。

夫人はバルベリニ広場の「貝を吹くトリトン」を童話のようだと面白がった。ポリの邸館の広場に在る「トレビの噴水」を劇的だと言った。

「市街の広場を圧するほど展開した岩組が、簾すだれの滝のように水で充ちている。その上にトリトンに牽かして行く貝殻型の車駕に御して海神が嘯うそぶいている。夏の真昼、水の落ち口の池の角のところ

に佇って、あのきらきら降り注ぐ陽の光の無音の雨の音と、滝の

簾の音とびったりリズムを合すときに、ひよつとすると岩の陰から少し青ざめたプリムノの仙女ニンフと白く薔薇色ばらのプレキサウレの仙女ニンフとがふわつと浮び上つて、くるくると身体を纏もつれ合すと直ぐ流れに融け込んで見えなくなつてしまいます。不思議なことにそれに見惚れている間は何秒であるのか、何分であるのか、天地の物音はびたりと音を止めたようになって、見ている者の意識に入らないのです。この間の恍惚こうこつの痺しびれ。これを何に譬えたらいいでしょう。か。幻想を起さすために世紀末のフランスの廃はい頽たい詩人たちが喫のんだアツシという土人の煙草たばこなどはおよそ不健康な恍惚の痺れです。噴水の恍惚は醒めたあと愈々いよいよ精神を明澄にします」

ちようどこの時分英国にはコナン・ドイルの神秘主義というものが流行はやっていた。舞台へ空の椅子いすを置いて、死人の魂を呼び戻すと称する集りなどが行われていた。私はエドナ夫人に「あなたはドイルの神秘主義を信奉なさいますか」と訊いてみた。夫人は「あんな通俗なもの、単なる靈媒れいばい術です」と言った。そして「私のは合理に拠よる美的判断の結果、粗物を棄捨した現実脱化です。心理学的方法はリップスに拠りますが、むかしの羅典ラテン民族と同じエスプリです。詩人の魂です」と言った。

こういう話をする間、ロジャー氏は独りでぶつぶつ言いながら新噴水にかかずらっていた。その後、二三度訪ねたが、ロジャー

氏は屋根を天文台のように蒼穹抜きにしてみたり、ステインド硝子を窓に嵌めたりしていた。新噴水を夫人の気に入るよう、いわゆるニンフ仙女が現われるよう効果を工夫してもいた。しかし夫人は相変わらず「ニンフ仙女が見えない」の一点張りだった。私はいくら美しく智的詩人型の若夫人でも、あんまり自分の幻想に固執して老夫をいた労わらなさ過ぎる態度に嫌な気がして遠のいてしまった。

# 青空文庫情報

底本：「岡本かの子全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1993（平成5）年9月22日第1刷発行

底本の親本：「丸の内草話」青年書房

1939（昭和14）年5月発行

入力：門田裕志

校正：石井一成

2013年10月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 噴水物語

## 岡本かの子

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>